



## ウサギ年を旅してー 続き

夕張市医師会  
介護老人保健施設虹ヶ丘 施設長  
**岡部 紘 明**

道医報正月号の新春随想「ウサギ年を旅して」に、卯年は時代の変革の先陣を切ると書いたが、悪夢の東日本大地震と津波と福島原発事故が先陣を切った。

千年に一度の大震災でこれから多くの人々の難儀が思いやられます。多くの殉難死者の冥福を祈り、被災された多くの皆様にお掛けする言葉もありません。

平成23年3月11日（金）午後2時46分頃、このとき私は羽田空港から鎌倉の自宅に帰る途中で、横浜駅に向かっていました。リムジンバスは横浜駅近所で停止した。上を見ると高速道路の下で、橋桁が揺れていた。乗客一同恐怖の声を上げた。揺れが治まり横浜駅に着き、横須賀線に乗ろうとしたら、乗客はプラットホームから構外に導かれていた。駅構内で、また大きな余震に襲われた。地下街はシャッターを下ろし、客を店から外に誘導するように構内放送が流れ、数万の人々が右往左往する中で、危険を感じてすぐ外に出た。ちょうど、大船行きのバスが止まっていたので、飛び乗ったがなかなか動かない。身動きのできない満員の車中で、勤務先の夕張から安否の携帯電話が入った。無事バス中にいることを伝えたが、これが携帯電話の通じた最後であった。すぐ自宅に電話したが通じず、メールでようやく連絡が取れた。

街灯や交通信号が停電で、遮断機も作動しない、JRはもとよりバス、タクシーも通れなかった。バスは何度か余震のたびに停車し、海岸通りは津波警報で通行止めであった。鎌倉は過去に大仏殿が津波に流された歴史があるので、材木座海岸、由比ガ浜、七里ガ浜から江ノ島に向かう海岸通りは津波警報で通行止めであった。結局、真っ暗闇の道を大船から北鎌倉、建長寺、鶴岡八幡宮裏へと出て、歩いて帰るはめになった。家に着いたのは午後10時頃であった。

翌日、NYでNHKのニュースを見てコーネル大学医学部のS.N教授から、早速安否とお見舞いのメールが来た。地震、津波被害の全容が掴めない状態であったが、原発の危険性を指摘していた。一部抜粋してみる。

“We are relieved to hear that you are both

safe. We too are concerned about the nuclear disaster. We hope the damage to the reactors will be contained and there will be no spread of radioactivity and the contamination of foods. Here in the United States the Japanese and American organizations are planning a massive donation drive to help the Tsunami and earthquake victims in Japan. We are confident that the Japanese spirit and resolve will enable the people of Japan to rebuild the damaged part of the country.”

2報目でも、“From NHK News we learn that the nuclear crises in Fukushima is still unresolved. An unprecedented tragedy.”として、日本の状況を大変心配してくれている。

情報は世界中飛び回っているが、国内の一番情報が必要とされているところでは通じない日本の現状である。


この間私は数回のメールのやり取りをした。お礼とともに原発事故の危惧があることを話した。原発の事故は、スリーマイル島やチェリノブイリと過去にあるが、今回の「東日本大震災」は異質の天災、災害であり、人災も含まれるかもしれない。

一度にすべてが失われた時の中に、多くの死者を置き去りにし、思い出も幻の風景になり、数字はただ黙って語り続け、日々の報道は、いつの間にかベクレルの話とメディアを含め政治家たちは災害そっちのけで予算反対や内閣不信任の話題に時間と予算を浪費している。広島、長崎と世界で初の原爆被爆経験は生かされていない。原発は原子力の平和利用であるが、原子力工学の基礎学問を忘れた功利主義をむき出しにしてしまった。「色即是空」としてはあまりの無情である。

震災後3ヵ月ほど経った6月11日に、盛岡で専門分野の臨床検査専門医会があった。被災地フロントラインの医療関係と福祉関連施設の状況を視察する機会を持った。当日、自宅に寄らずに、千歳ー羽田経由で、新幹線で盛岡に向かった。会は盛岡アイーナ岩手県民情報センターで行われ、情報交換会はすでに始まっていた。S.N教授の知人でもある福島のH.Y名誉教授とは学会場で会うことができた。病院、自宅ともに、若干の被害を被ったとのこと。

翌日の夕刻、宮古市に向かうことになり、駅そばのホテルに宿泊した。この3ヵ月は被災者の精神面と現実面と葛藤が大きく、現地では一番苦しい時期なので、深く立ち入ることを避けた。

翌日、報告会の後、宮古市に向かい、途中被災地を窓越しに見ながら、宮古市内のホテル沢田屋に宿泊した。ホテルは津波に襲われたが宿泊できるよう



に修築している。数人1室で、全国からの多くのボランティアが宿泊していた。

宮古市を視察したとH.Y名誉教授の無事をNYのS.N教授に知らせた。すぐ、“It is so sad what happened in Miyako City. The whole world watched the devastation unfold on Television. We have been in touch with Prof. Y. and we feel the pain of the people in Fukushima.”と返事が来た。

案内してくれた三陸鉄道勤務のA氏の説明では(彼の自宅も津波で破壊流出した)、宮古地区は過去の津波被災経験を生かして人的被害は少なかった。しかし、6月10日の時点で、宮古市での死者417人、行方不明者355人、避難者数2,423人、倒壊家屋数4,675棟と県災害対策本部から報告されていた。岩手医大、日赤、他県派遣の医療チームによる巡回診療は翌日3月12日から、保健師派遣、高齢者福祉関係者、介護職員等、県外応援者の派遣など、1週間以内に行動を開始している。3月28日には宮古病院は通常診療を再開したようだ。

宮古の診療所はがれきの山に埋もれていた。翌日早朝からボランティアの人々の邪魔にならないように、鉾ヶ崎地区、田老地区の防波堤、田老港、田老・グリーンピア仮設住宅を視察。田老グリーンピア宮

古の跡地に、仮設住宅を建設していた。

広々とした敷地の中に、仮設でなく将来を見据えた、一つのタウンの建設も可能である。ここに病院あるいは診療所、幼稚園、保育園を含めた教育施設や老人ホーム、介護福祉施設の設立も考えているとのこと。

陸中山田駅付近は魚介類の腐敗臭が強く、津軽石駅では流出した車両や駅付近の火災の跡など、今後の復興の困難さも見受けられた。しかし宮古市民の台所「魚菜市场」は活気あり頼もしかった。日曜ではあったが、途中、警察関係の遺体検死の車が仕事をし、道警もまだ電気の来ない地区の交通整理に携り、自衛隊の献身的な働きは、住民の感謝の声が大きかった。

鎌倉では、4月11日に鎌倉鶴岡八幡宮で、神道、仏教、キリスト教、各宗教界合同の慰霊追悼会が執り行なわれ、7月9日には鎌倉五山第一寺の建長寺で、すべての生きとし生けるものへの供養のための大施餓鬼会が開かれた。妙高院浅井師法話では、今、日本人には「足るを知る」という心構えが必要であると説教された。

視察したのは被災地の一部に過ぎないが、大震災で亡くなられた方々へのご冥福を祈り、また被災された方々へのお見舞いの心を込め、合掌。

## 北海道医師会サポートセンターのご利用について

◇情報広報部◇

北海道医師会サポートセンターでは、本会提供のメールアドレスに関するご相談だけでなく、パソコン操作やインターネット利用に関する質問対応も承っております。日頃のパソコン利用におけるちょっとした疑問点やトラブル対応の第一相談窓口として、お気軽にご利用ください。

### お問い合わせ例

パソコンをMacに変えたら使い方がよくわからない・・・ご利用方法をご案内  
プロジェクターでパソコンの映像を映したい・・・ご利用方法をご案内  
光電話ってどうしたら使えるの・・・光電話についてご案内、取次ぎも可能  
エクセルの使い方がよくわからない・・・一般的な使い方であればご案内可能  
サポートに来てほしい・・・駆けつけ業者を手配します(有料となります)

お問い合わせ先：北海道医師会サポートセンター（平日 10:00～12:00、13:00～17:00）

○TEL： 011-738-3401

○E-mail： support@hokkaido.med.or.jp